における草薙剣に関する伝承について――とはずがたりと熱田大明神御記伝百録を通して――」（『国文研究』一九七三年）がある。

（八）次田香澄氏（『とはずがたり』日本古典全書）に、作者の宗教的動機と説話の愛好、又新しい出来事まで説話化して流布する中世的傾向の指摘がある。

（九）山田昭全氏の「柿本人麿供の成立と展開――仏教と文学との接触に視点を置いて――」（『大正大学研究記要』五一　一九六六年）、最近では佐々木孝浩氏「『とはずがたり』の人麿影供――二条の血統意識と六条有房の通光影供をめぐって――」（『国語と国文学』七〇巻第七号　一九九三年）がある。

（一〇）父は往生を確認する近親者であると同時に、ここでは巫者的印象が強く、⑮の翁に類似する役割を担っており、折口信夫氏の説く神仏との仲介的役割を果たす翁の存在が考えられる。

（十一）『新訂増補国史大系』二一下所収。猶、本作品と『増鏡』の書承背景に関しては、前掲の松本氏の説を初めとし、宮内三二郎氏『とはずがたり・徒然草・増鏡新見』（明治書院）、最近では竹本源吾氏「『増鏡』の作者についての考証――『とはずがたり』――後深草院二条とのかかわり」（『ぐんしょ』二十二号　一九九三年）等に詳しい。

（十二）杉岡津岐子氏「中世の女流日記文学における夢――『とはずがたり』を中心に――」（『イマーゴ』一九九一年十一月臨時創刊号）及び、日本文学古典大系『とはずがたり　たまきはる』（一九九四年）

（十三）『群書類従』神祇部所収。熊野神道ともいうべき雑多な祭神の縁起を説く。

（十四）『保元物語』上「法皇熊野御参詣并御たくせんの事」、『古今著文集』十一「侍従大納言成通の鞠は凡夫の業に非ざる事」の例。また阿部氏の前掲論文に『三国伝記』「高光少将遁世往生事」の指摘もある。

（十五）『群書類従』紀行部所収

（十六）『神道大系』「熊野三山」所収

（十七）右同

（十八）『百錬抄』『五代帝王物語』『一代要記』『編年記』等に見る、後嵯峨院三度、亀山院一度に至るまで皇室の御幸は、数百度に及ぶ。猶、亀山院の弘安四年を以て、御幸は最後となる。

（ふじい・さみ　尾道短期大学非常勤講師）

芥川龍之介「羅生門」論

――老婆の勝利で終わる物語――

許　南　薫

はじめに

芥川龍之介の「羅生門」は大正四年十一月『帝国文学』に発表されて以来現在に至るまで幅広い読者層をもつ日本の国民文学的な存在になっており、その分作品研究も盛んになされ、現在まで書かれた「羅生門」に関する研究論文は三百編近くにもなっている。「羅生門」を研究しようとする際、最も重要で至難な作業はこのような膨大な数の先行研究を整理し、自分なりに理解することであろう。

「羅生門」は原稿用紙に換算すると十五・六枚程度の短い短篇であり、実際書かれている作品内の経過時間も一時間にもならない短時間であり、登場人物も主人公の下人と老婆の二人しかいないという極めて簡単な構造の作品である。この簡単な構造の中での唯一の事件、つまり羅生門の楼の上で下人と老婆の間に起きた出来事を中心に現在まで数多くの「羅生門」論が書かれてきた。その論の殆どは、主人公の下人の心理の変化や変貌していく下人の様子に焦点を合わせて作品を読んでいるのが実状である。テキストの言説の多くの部分が下人の心理の説明に割り当てられ、語り手の視点も殆ど下人の側を離れないという事実からみると、それは当然のことであるともいえる。

しかしそのため、この作品の下人以外の唯一の登場人物である老婆の存在は無視されていいのかという疑問が生じる。もちろん殆どすべての論が、老婆の弁解の部分も重点的に分析し、そこから下人が何を読み取ったかということに関して言及している。しかしそれはあくまでも下人側から考えた老婆の弁解の論理であって、老婆の人格や老婆の身の上の変化などに注目している論は、さほど見あたらない。このような状況をふまえて、羅生門の楼の上での出来事を、老婆を中心に老婆側に寄り添った視点をもって読んでみることによって、「羅生門」の読みに若干の疑問を提示してみようとするのが本稿の目的である。

一、老婆と下人の遭遇

羅生門の下まで辿り着いた下人が、明日から「盗人になる」か「饑死をする」かという二者択一の岐路に立って逡巡しているという設定から物語は動き始める。しかしこのような設定にはなっているものの、実際下人の胸中はそうではない。語り手も「どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでゐる遑はない」「手段を選ばないことを肯定しながらも」と説明しているように、明日の行為についてはもう「盗人になる」ということに決めているとみていいだろう。それでも勇気を出せずに逡巡している理由はおそらく《下人はすでに選ぶべき方向を決定しているのであって、その逡巡は飢餓状態の内実がまだ法の規制を破るまでに飽和していないからにすぎない(一)》ためであろう。このような状況の下人が、「雨風の患のない、人目にかゝる惧れのない、一晩樂にねられそうな所」を目指して羅生門の楼の上に上がることによって下人と老婆の出会いが始まる。

下人は、始めから、この上にゐる者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其処此処と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。（傍線引用者、以下同じ）

この時老婆は、松の木片に火を灯して自分の仕事（生業）を始めようとしていたところであろう。杉本優氏の指摘通り《最も安全な活動条件》の中で仕事を始めようと「その火を其処此処と動かし」ながら、一番いい条件の死体を物色していたところだったと解釈するのが妥当であろう。その後老婆は、下人の視野に「ごろごろ床の上にころがつてゐた」他の死骸とは違う存在、つまり「其の死骸の中に蹲つてゐる人間」として初めて捉えられる。この最初の発見から下人が「いきなり、梯子から上へ飛上がつた」時までの、老婆の行為に関する記述は次の二箇所である。

・その老婆は、右の手に火をともした松の木切れを持つて、その死骸の一つの顔を覗きこむやうに眺めてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

・すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてゐた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髪の毛を一本づゝ抜きはじめた。髪は手に従つて抜けるらしい。

木村一信氏が、もしも老婆が梯子を上がってくる下人に気付いたら、《やはり驚愕と恐怖とに老婆も襲われたであろう(二)》と指摘しているが、ここまでの老婆の行動に関する描写からは、非常に落ち着いて安定している老婆の様子がうかがえる。原話の『今昔物語集』(三)巻二十九の「羅生門登上層見死人盗人語第十八」では、盗人が楼上を覗き込んだ時にはすでに老婆が死骸の髪の毛を抜いていた。しかし「羅生門」の下人は、老婆による死骸の物色過程（「その火を、其処此処と動かしてゐる」）から始まって、若干の躊躇いの過程（「覗きこむやうに眺めてゐた」「今まで眺めてゐた」）を経て、実行に移すすべての過程を見せられている。この躊躇いの段階は、後の老婆の弁解の論理の一つである「その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。」という論理に正当性を付与する役割を果たしている。また周知の通り原話ではその女は、老婆が「主にて御ましつる」「若き女」と設定されている。平安京第一の門である羅生門が死体捨て場になっているという世紀末的な時代設定に加えて、堅く守られるべき身分関係も崩壊され、人々の精神文化も同様に荒廃化し乾燥していることを物語っている。これが「羅生門」では、「多分女の死骸であろう」という表現だけで片付けられている。年齢、身分などの限定を放棄している。その代わり、同じく『今昔物語集』巻三十一の「太刀帯陣売魚嫗語第二十一」の話を引用して、その話の主人公が死んで運ばれているという設定に入れ替えられている。作品の後半に登場する老婆の弁解の論理を裏付けるためには、年齢や身分などの問題よりは、その女がかつては老婆のような悪人でなければならない必要があったための設定変更であると思われる。わざわざ老婆の仕事の一連のサイクルを全部見せている語り手の意図に注目したい。また老婆の行為の実行は、「火をともした松の木片」が必要になるほど暗くなった時点になってから行なわれる。老婆には、自分の行為が明るい昼間に堂々とやれることではないという最小限の罪の意識はあったと思われる。これこそ世紀末的な時代を柔軟に生き抜くための秘訣であるかもしれない。

二、老婆と下人の対決

予期せぬ下人の出現に驚いた老婆は反射的な反応として逃げようとする。しかし結局下人の力には勝てず、下人の前にねじ倒されてしまう。ここでの老婆の驚きぶりを見ると、下人が最初に老婆を視野の中に入れた時の驚きぶりとは少し違うということが発見できる。下人が老婆を目にした時の彼の行動は、殆どヒステリー反応(四)に近いものであった。下人が老婆を目にした時彼は、「もう鼻を掩ふ事を忘れて」「六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れて」「頭身の毛も太るやうに感じ」るほどの恐怖に襲われるのである。原話の「此れは若し鬼にや有らむ」と同じような性質の恐怖感に襲われて、心身とも麻痺し、動けなくなるような状態になっていた。一方、老婆は全然予想できなかった突発の事態のため、「まるで石弓にでもはじかれたやうに、飛び上がつた」ものの、すぐ「逃げようと」し「それでも下人をつきのけて行かうと」し、「しばらく、無言のまま、つかみ合」う過程を経ている。結局下人の力には勝てず、下人の前にねじ倒されてしまうものの、あくまでも最大限の抵抗の行為を見せている。下人にとって老婆はいわば世紀末的な時代状況を

生きる人間の象徴のようなものであったのである。同じように恐怖の場面に出会った時、下人が恐怖のために動きもとれなくなってしまうのに対して、老婆はあくまでも〈生きる〉ための本能的な抵抗を続けるのである。どんな極限状況であっても、人間は生きるための努力を続けなければならないという世の中を生きぬいていくための〈生の論理〉を下人に見せている暗示の部分だと読みたい。この時すでに、羅生門の下での下人の逡巡の原因は解除されているともいえる。しかし、あまりにも感情的で性急な青年の下人に、このことに気付く余裕はなかったのである。

下人にとっては特殊な状況である「この雨の夜に、この羅生門の上」であっても、老婆にとっては最も落ち着いて仕事の出来る安定した状況に突然侵入者が現われた時、老婆は瞬間的に命の危機を感じたであろう。特に、目の前に太刀の鋼の色を突き付けられた時の恐怖は頂点に達していた筈である。この時、老婆は一瞬死を覚悟していたかも知れない。

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙つてゐる。両手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が瞼の外へ出さうになる程、見開いて、唖のやうに執拗く黙つてゐる。

最初に羅生門の楼の上を覗き込んだ時、下人が発見した死骸がみんな「永久に唖の如く黙つてゐた」ように、下人の力の前にねじ倒された老婆も同様「唖のやうに執拗く黙つてゐる」のである。この時の下人の前にねじ倒されている老婆は死骸同様の無気力な存在になっている。老婆は最大の危機をむかえているといえる。

老婆は一度は死を覚悟するほどの極限の状況にまで追い詰められるものの、下人の憎悪の心が冷めて「安らかな得意と満足」のため「聲を柔げて」いる様子から、素早く相手の変貌を感じ取る。特に下人が「おれは検非違使の廳の役人などではない」とまで言った時には、もう死の恐怖からは逃れて「鋭い眼で」「ぢつとその下人の顔を見守」るほどの余裕を取り戻しているのである。テキストからも老婆の命が危ないという状況、つまり「眼の前に太刀の鋼の色を突き付けられた」非常事態はもう解除されていることが読み取れる。すでに太刀の鋼は下人の鞘へと消えていってしまったのである。

高橋陽子氏に、《この下人は極めて知的である。彼は、死人／老婆の関係が、老婆／下人の関係と相同的であることを知っている》[五]という指摘があるが、老婆は下人よりもっと知的であると思われる。老婆の〈知〉なるものは、極限状況を生きていく内に体得した一つの知恵であり、老獪さであり、したたかさであり、どんな状況にも対応出来るような柔軟さであって、いわば老婆の〈生の論理〉である。この問題を羅生門の外の世界まで拡大すると、それはつまり世紀末的世界を生き抜くための〈生の論理〉になる訳である。四・五日前までは、ただ主人に従順さえすれば何の生の脅威もなかった世界にいた下人にとっては、なによりも先に体得しなければならない論理なのである。盗人になるか飢死をするかの二項対立の世界しか持っていない下人に老婆は行為をもって《第三項としての身の処し方を提示》[六]しているのである。石割透氏の指摘通り《〈盗人〉になることでもなく、執拗に生き延びる方法もあること》をこの後の老婆は下人に見せようとしている。

老婆にとって一番大事だったのは、自分の命を奪われないことであった。自分がやっていることが法律に違反し、その法律が支配する世界では自分の行為が罪になるとの意識があったから、「おれは検非違使の廳の役人などではない」という下人の自己紹介があるまでは、何も言えずにいたのである。もし相手が「検非違使の廳の役人」なら、自分の命の保証はなくなる。下人の言葉を聞いて処刑や逮捕の恐れから開放されてから、やっと元の自分にもどって「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、髪にせうと思うたのぢや」と答えるようになる。しかし、下人が自分の平凡な答えに「失望すると同時に、また前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た」気色にすぐ気付くのは勿論のことである。それで、もう一度訪れるかも知れない危機を回避するために、つまり一度おさめた太刀が再び目の前に現われる状況から逃れるために長い弁明を述べるのである。

成程な、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。ぢやが、こゝにゐる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりだぞよ。現に、わしが今髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、千魚だと云うて、太刀帯の陣へ賣りに往んだわ。（中略）わしはこの女のした事が悪いとは思うてゐぬ。せねば、饑死にをするのぢやて、仕方がなくした事であろ。されば、今又、わしのしてゐた事も悪いこととは思はぬぞよ。これとてもやはりせねば、饑死にをするのぢやて、仕方がなくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。

老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

老婆の弁明は、緊迫した状況でもし心理的にも完全に追い詰められていたらとても出そうにもない論理的で辻褄のあった弁解であると思われる。原話では、老婆が盗人の許しを求める「助け給へ」という言葉で締め括られているが、「羅生門」の老婆は下人の許しを求めていない。ほぼ対等な関係で、下人に自分の行為の正当性ないしは必然性を説明し、まるで説教でもしているかのような口振りで、対話をしているのである。

周知の通り、老婆の弁解の部分は、初出では間接話法になっていたが、『鼻』（大正七年七月、春陽堂）に収録の際に直接話法に変えられた。前掲の論文で杉本優氏は、老婆の弁解の部分が《直接話法のようなかたちに改変されたにもかかわらずその直後の「老婆は、大体、こんな意味の事を云つた」という一文は改められていない事実に注目》して、《作品の論理が改変を許さないのである。老婆のおそらくはしどろもどろの弁明に論理を与えて

いるのはまず語りであり、語られる世界に即せば、「冷然として、この話を聞いてゐた」下人の思考である》と指摘している。確かに「老婆は、大体、こんな意味の事を云つた」という一文によって、改変後の文章が完全に直接話法になっているとは言えない。が、私が注目したいのは、文章の形の上での外形的な変化よりは、老婆の弁明の言葉遣いが完全に会話体になっているということである。この会話体の文章は、読者に臨場感を与えてくれる。この会話体の言葉遣いによって、今までは後景に過ぎなかった老婆の存在が物語の前面に登場するようになる。

三、老婆の勝利

諸家が指摘しているように、この老婆の弁解の論理によって下人は勇気をもつことが出来、盗人になる決心を固めたということは揺るがせない事実だと思われる。勿論下人が老婆の論理を自分の論理として受け入れたか、それともその老婆の論理をのり越えて行為へと向かったかという問題については意見が分かれている。私論としては、下人は老婆の論理をのり越えることが出来なかったのは勿論、完全に老婆の〈生の論理〉を理解し、自分のものにすることも出来なかったと考えたい。老婆の〈生の論理〉は、死者の世界（羅生門の楼の上）をも支配している人間の論理である。「羅生門」には物語世界を統括し、その世界と読者を積極的に媒介する語り手が存在する。その語り手の説明によると、当時の京都は日常的な秩序の破壊は勿論のこと、最も神聖視されるべきの「佛像や佛具を打碎いて」「薪の料に賣つてゐたと云ふ事」から推測される人々の精神生活の破壊と、人々の生死に関わる儀式すらも重要視されることなく死体を「築地の下か、道ばたの土の上」や「この門の上」などに放置するといった、世紀末的な状況であった。そのような時代状況の象徴的な場としての羅生門のもつ意味を考えると、その支配者なる老婆の論理は、倫理や善悪の概念を考えるより生存がまず優先される世界の論理である。どんな極限状況でも人間は生きるための努力を続けなければならないという老婆の〈生の論理〉は理解出来ず、ただ老婆の弁解からどうしようもない場合に行なわれる〈悪〉は許されるという単純な論理だけを受け取って門の外へ出ていくのである。「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、饑死をする體なのだ」といって、「老婆の着物を剥ぎと」ることによって、《悪の恍惚感》[七]だけを味わって闇の中へ消えてしまうという軽薄で感情的な行動がこれを裏付けてくれる。もし下人が老婆の論理の真の意味に気付いていたら、原話の盗人のように「死人の著たる衣と嫗の著たる衣と抜取てある髪とを奪取て」から消えていくべきだったのではないか。老婆の〈生の論理〉よりどうしようもない場合に行われる〈悪〉は許されるという単純な論理の方が生命力が短い筈である。やがて下人は、強盗に失敗して「この門の上へ持つて来て、犬のやうに棄てられてしまふ」境遇になるかも知れない。[八]

しかし、下人がどのような論理を得て、これから何者になろうが、老婆にはあまり関係のないことである。老婆の最初の目的、つまり命だけ助けられればいいという目的は見事に達成できたのである。老婆は何の被害も受けていない。本当に下人に必要だったのは老婆の弁解に込められた単純な論理ではなく、その論理を展開する老婆の行為の意味、つまり老婆の〈生の論理〉の方だったのである。羅生門の楼の上での出来事は、こういうふうに、〈下人の未熟な生へのスタート〉と〈老婆の無事〉という、完全な老婆の勝利の形で、その幕を閉じている。

最後の部分の語り手の視線が、急変して老婆にとどまったままの形で物語が終わっているのはとても意味深いことだと思われる。「暫死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である」といって、老婆の健在ぶりを強調している語り手の言説に注目したい。老婆に代表される世界（環境）は何も変わっていない。今まで物語の中心的存在であった下人は「黒洞々たる闇」の中に放逐され、語り手の視野の中にはもういない。下人は真の意味での〈境界線〉を突破して一人前の男になっていくことに失敗した。それを読者に語るために語り手の視線は老婆の上にとどまる。下人に代表される青年の世界を見切り、老婆に代表される現実世界を憎みながらも受け入れざるを得なかった芥川自身の境遇がここに投影されているとも考えられる。[九]

この語り手の背後に作者芥川龍之介の存在を認め、下人の姿に芥川自身の想念が投影されているとすると、この老婆／下人の関係の転倒の裏には、実生活の吉田弥生との恋愛問題の影響から生まれた彼の世間に対する認識が働いているといえる。失恋事件後深い喪失感と世間に対する失望が彼を襲うものの、にくいが受け入れざるを得なかった現実世界への認識が反映された結果だと思われる。しかし初出の「羅生門」においては、下人の行方に対する希望を完全には捨てていない。「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでゐた」という文末で作品を締めくくることにより、下人の未来にそれなりの可能性は与えられていた。強盗になるための勇気を得ることに成功し、その行為の実践へと急ぐ下人の姿からは活気さえ感じられる。しかし約三年後の改変の時、だんだん現実世界に慣れていき、青年（下人）であるつもりであった自分が、老婆に代表される世界のど真中に入っている姿を発見したとき、改変は必然であった。

すでに文壇という現実世界の中心的存在になっている自分の状況を顧みたとき、三好行雄氏が指摘するように《下人の行方を「誰も知らない」闇の中に突き放すことで未来への眺望をみずから閉じ》[十]ることにより、下人に代表される青年の世界への決別を告げるしかなかったのである。

おわりに

以上、今まで様々な角度から論じられてきた芥川龍之介の「羅生門」を、老婆の視点からのアプローチという新しい試みをもって考察してみた。今までは下人の目を通してしか見られなかった老婆の存在に注目してみることにより、羅生門の楼の上での出来事が〈下人の未熟な生へのスタート〉と〈老婆の無事〉という老婆の勝利の形で結ばれているという結論が誘導できた。下人の世界への見切りとその反動としての老婆の世界への収斂というドラマを紡ぎだす語り手の背後には、失恋事件以後それほど憎んでいた現実世界のど真ん中に位置している自分の存在を発見した作者芥川龍之介の苦悩する姿がうかがえよう。このような対世間認識もしくは対他者認識が「羅生門」以後の作品世界にどんな形で投影されているかという問題は今後の研究課題としたい。

注

（一）杉本優「下人が強盗になる物語ー『羅生門』論」（『日本近代文学』第41集、1989年10月）

（二）木村一信「『羅生門』論ー己の座標を求めて」（関口安義編『アプローチ芥川龍之介』、明治書院、1992年5月）

（三）『今昔物語集』の引用は、博文館発行の『校註国文叢書第十七冊　今昔物語下巻』（大正四年八月発行、本稿では大正十五年三月発行の五版を利用）による。

（四）宮城音弥氏は『性格』（岩波新書、1960年初版）で、ヒステリー反応を次のように規定している。

《人間では、知性が発達しているので、必ずしも、このような本能的な行動（擬死反射、運動暴発：引用者註）を行なわないが、ショックを受けた時には、知性が麻痺し、冷静に考えて事を処することができず、心のうちに潜んでいる原始的、本能的の行動様式が頭をもちあげる。これがヒステリー反応である》。また、《社会が安定している平和時には、ヒステリー性格者は、社会の寄生虫にすぎないが、社会が動揺する時には、その能力を発揮する》とも説明しているがこのような特徴は、「羅生門」の下人の性格に極めて近い人格を指しているのではないかと思われる。

（五）高橋陽子「『羅生門』と『偸盗』」（日本女子大学大学院の会『会誌』2号、1980年9月）

（六）石割透「芥川龍之介『羅生門』ー〈髪〉み纏わる〈蛇〉と〈女〉」（『日本近代文学』第52集、1995年5月）

（七）三谷邦明「〈座談会〉『羅生門』を読む」（『日本文学』、1984年8月）

（八）勝倉壽一氏は「『羅生門』の解釈」（『愛媛国文研究』第87集、1980年12月）で次のような指摘をしている。

《だが、老婆は下人によっていかなる報復を受け、その生の論理なり生存の場を脅かされたと言い得るのか。老婆の奪われた衣類は、「着物を着た死骸」から直ちに調達されるのであろうし、死骸の髪を抜いてたつきとするその日常にいかなる変化も起こりようはない。老婆の論理を奪い取ったかに見える下人の未来が、やがてより強者の生の論理の前に犠牲となって「羅生門の上へ持ってきて、犬のやうに棄てられ」、老婆によって衣類、頭髪を奪われる運命にあることを否定する根拠もないのである》

（九）芥川の「運」（『文章世界』、大正六年一月）という作品に登場する翁と青侍の対立構図も「羅生門」の延長線上で考えられると思う。翁の話を聞いた青侍は、「それなら、その位な目に遇つても、結構ちやないか」「人を殺したつて、物盗りの女房になつたつて、する気でしたんでなければ、仕方がないやね」といい、もっぱら自分の価値観による判断を下す。この「人を殺したつて、物盗りの女房になつたつて、する気でしたんでなければ、仕方がないやね」という論理は、「羅生門」の下人が楼上で老婆によって獲得した論理にほぼ近い。性急で感情的な態度は、何となく「羅生門」の下人に似ているような感じもする。「羅生門」の下人の未熟な生へのスタートが最後に語り手によって見捨てられるように、「運」では翁によって青侍の認識の浅薄さが相対化される。

（十）三好行雄「無明の闇ー『羅生門』再読」（『国語と国文学』、1975年4月）

（ほ・なむふん　本学大学院博士課程）